日本産ブユの普通種 *venustum* type の4種について

正垣 幸男

Shogaki, Y.: Studies on four
species of Japanese common
black flies, *venustum* type

筆者が昨年(1953)に報告した西日本の平地性の普通種 *Simulium salopiense* と同様に西日本の丘地山地に普通に見られる *S. venustum* type の4種について報告したい。即ち *S. venustum*, *S. oitana*, *S. tuberosum*, J-5 の4種で蛹の呼吸管の filaments が何れも6本であつて蛹、成虫共に酷似している group である。此のうち *S. oitana* は従来 *S. aokii* Takahasi, 1941 と称されていた種に一致し、*S. aokii* は *S. oitana* Shiraki, 1935 の Synonym であると思われ、J-5 は本邦での未記録種で仮称の種である。この4種の形態の差異は蛹の繭は何れもスリッパ型であるが、*venustum*, *oitana* は全く同形で口縁下底が稍と拡つて附着物につき、*tuberosum*, J-5 は同形であるが同下底が稍と内側に彎曲してつので両種の繭の正面断面図が異なる。蛹の呼吸管の filaments の分枝する角度が *venustum* 類では振り 90° 以上であり、*tuberosum* 類では 90° 以内である。雌の外部生殖器の anterior gonapophyses のかん入の彎曲度が *oitana* では最も大きくて円を描き、次いで *venustum*, *tuberosum* となり J-5 は最もせまい間隙を示してかん入している。なお J-5 の第7腹節には顕著な剛毛束がある。*oitana* では雌の後肢腿節の先端部に黒斑あり他は黄色、*venustum* では基部に少しの黄色部があり他は黒色、*tuberosum* では全体が黒色、J-5 では先端部が黒色で全体は稍と淡黒色である。雌の肢の爪は *oitana* のみが三角形の歯状突起があり他にはなし。雄の外部生殖器の clasper の爪状突起が *venustum*, *oitana* では亜先端に著き、*tuberosum*, J-5 では先端に著いている。*oitana* では雄の scutum, scutellum に黄金色の稍と長い毛が密生し、他の scutum はビロード黒色の地に灰色短絨毛が生えている。4種共其の蛹、幼虫は溪流水中に沈下しているセキショウ、アシ、カワヤナギ其他の禾本科植物の葉茎に附着し、石礫に著く事は少い。4種は中流、上流に混棲しているが上流より *S. tuberosum* > J-5 > *S. oitana* > *S. venustum* の順序で多いようである。*S. venustum* は京都、大阪、滋賀、奈良、三重、和歌山、兵庫、鳥取、石川、長野、東京、埼玉、神奈川、静岡、山梨、香川、愛媛、徳島、高知、大分、宮崎、鹿児島、長

崎、熊本、札幌の諸地方に見られ、*S. oitana* は札幌を除し上記各地方より得ているが、*S. tuberosum*, J-5 は以上の内10地方より得ていない。併し今後の調査に依りより多く分布する事が解るものと思う。

[米軍 406 医研昆虫]

マウスに脾腫と腹膜炎を起す原虫について(本邦に於ける *Toxoplasma* 分離の最初の報告)

笠原四郎・石田国男

Kasahara, S. & Ishida, K.: Sporozoa
producing splenomegalia and peritonitis
mucinoserofibrinosa in mice

私共は泉熱ウィルスを患者発生地区で捕えた住家性鼠から分離する目的で、3群の鼠の脾肝腎乳剤をマウス腹腔内に累代接種を試みた。この際、2群からは泉熱ウィルス(マウスに脾腫を来さない)が得られたが、他の1群からは2代目からマウスに黒赤色を呈する著明な脾腫発生が認められた。かゝる脾の乳剤を以つて継代して行くと、接種後14日から1カ月位の間に、脾腫の外に粘稠なる腹水を多量に滲溜することがある。脾腫を示したマウスの腹膜塗抹標本及び脾臓切片標本から腹膜被蓋細胞及び細網系細胞原形質内に Schizogonie を営む原虫を検出した。ちなみにこの株の接種分離操作は石田が行い、この株をZ系といっている。原虫は笠原が最初に検出したのである。他方この脾腫発生因子は非濾過性であること、唯々1回の凍結融解でも、56°C 30分間加温でも感染力を失うことを証明して、その脾腫発生因子が原虫性であることの裏附をした。接種部位については腹腔内の外、皮下、静脈内、脳内でも脾腫を生ずる。更に、猩紅熱及び所謂給食病患者血液をマウス腹腔内に累代接種して、無菌性腹膜炎、腹水、脾腫を認めた場合に原虫を検出した。又各地で捕えた野鼠・家鼠の脾乳剤、*Trombicula* 乳剤をマウス腹腔内に接種して、リケッチア分離を試みた際、一見リケッチア性腹膜炎と脾腫を来すが、リケッチア検出陰性の株がある。此の際にも原虫が検出せられた。かゝる原虫株はZ系の外、三浦半島剣崎のアカネズミ、同八堀のドブネズミ、八丈島ドブネズミに附着していた *Trombicula*、山梨県七保村ドブネズミ、同野鼠、同穂積村野鼠、福井県西田村野鼠、山梨県大泉村野鼠から分離された。野鼠を解剖して顕著な脾腫を呈したものゝ脾押捺標本からも原虫を検出し、且つこの脾乳剤をマウスに接種して初代において顕著な脾腫と原虫